

信頼とともに、

新たな農業経営を目指す

おくがわ  
奥川よしき  
良樹

(38歳)

— 平群町上庄 —

すべては農業へと  
つながる道だった

平群町を象徴する花として、町花にもなっている菊。その栽培は歴史的にも古く、平群町は全国でも有数の産地として広く知られている。

そんな菊農家の長男として生を受けた奥川良樹さんだが、実は家業を継ごうとは全く思っていなかったという。

「母が女性農業士だったので、夏休みなどにはよく手伝いをしていました。でも、自ら手伝うというよりは、手伝わされているという感覚でした。小さい頃は、お小遣いほしさもありましたしね

しっかりしていて、菌ごたえある食感が楽しめる。紅ほっぺは、おいしさはもちろんですが、その収量の多さも魅力です。

独自の発想力で  
チャレンジする農業経営へ

「イチゴ栽培を始めた理由はほかにもあって、それは年間雇用の実現です。2008年に法人化(農業生産法人)し、今、20〜30代を中心に約15人の従業員(正社員、パート含む)を雇用しています。法人化することで経営管理が向上し、人材の確保や育成にも結びついていく。ひいてはそれが、地域社会の活性化にもつながっていくんじゃないかと思うんです。この先いろいろやりたいことはあるんですが、今は勉強することも山ほどあって、

でも現状に満足せず、こんなところで満足してはダメ！もつとできることが沢山あるはず。強い気持ちには常にあります。土台となる生産力を持った上での力強い発言。新たな発想力はこうした基盤の上だからこそ成り立つのだ。農業経営の新たなスタイルにチャレンジする奥川さん、その挑戦はまだ続く。

夏秋期生産日本一を  
誇る平群の小菊

平群町では明治時代末期から菊の栽培が始まったといわれており、その歴史は100年以上にも及び。昭和50年代後半からは小菊に特化ブランド力をさらに強化してきた。日照条件や土質などが栽培環境に非常に適する土地で、さらに大阪や京都といった大消費地の近郊産地でもあることから、平群の小菊はブランドとして高い市場評価を得ている。年間出荷本数は約400万本、夏秋期生産としては日本一を誇る。奥川さんの農園では、100品種以上の小菊を手がけ、年間約250万本を出荷している。

「小菊は平群に」  
その信頼を大切にしたい

奥川さんが手がける小菊の品種は、100種類以上で、その栽培面積は約4ヘクタールを誇る。

「以前の約3倍の栽培面積になりました。代表的な品種は『小鈴』、それに『小紫』でしょうか。多くの品種を栽培していますが、それぞれにいろんな特徴があって、まるで子どもを百何人も育てているようなものなんです。そんな子どもたち(『小菊』)を5月〜12月まで切れ目なく、ずっと出荷し続けないと、経営は安定しません。

品種が多いということは産地としては有利なんです。例えば、小菊の赤、白、黄を20ケースずつほしいという注文が来たとします。それに対して、『はい、わかりました』という返事ができる。それが大きな信頼へとつながっていくんで



すね。『小菊は平群に頼めばいい』、そう言ってもらえると本当に嬉しいんです。

小菊は年間を通して栽培することも可能だ。うだが、真冬の暖房代などを考慮すると採算を取るのには困難だという。そんな中、奥川さんは4年前から裏作的な考えで、イチゴ栽培を始めた。

「イチゴは苗が大事なんです。自分でできればいいんですが、苗の管理が5月〜9月頃なので、自分で作るのには難しい。だから僕は、イチゴの苗をお願いして作ってもらっているんです。その方は、農協のときの上司なんです。退職後、イチゴ栽培をされていて。次に場所ですが、メロンを作っておられた方が栽培をやめるという話を聞き、そこを貸してもらえらることになって。この方も農協のときからおつき合いがありました。」

現在、イチゴは『古都華(ことか)』と『紅ほっぺ』の2種類。いずれも高設栽培に適した品種だという。

「古都華の魅力は、糖度が高く、香りが芳醇。果肉が

